

赤ちゃん成育ネットワーク会報

Network for Infant Health and Development, NIHD

2012/June 14号



古きハイデルベルク

明治政府は、西洋医学をドイツから学ぶことに決定した。そのため、森鷗外を初めドイツに留学した医学徒は数知れない。われわれも、医学部入学とともに多くのドイツ語講座を受けて、ドイツに憧れを抱いてきた。特にハイデルベルクなどの名は、ザルツブルクらの名とともにロマンと夢を誘い、いつの日にか訪れたい古都であった。医師になって20年目の夏、日独医学会があり、当地を訪ねた。ネッカー川に架かる古い橋（アルトブリッケ）に佇むと、やっとやってきたね、とハイデルベルク城が迎えてくれるようであった。この古城と橋と川の見事な佇まいは、昔も今も世界の人を魅了してやまないといわれる。ゲーテも世界で最も美しい橋と嘆息した。この周辺の景観は、ドイツの学生歌にも、次のように歌われているという。アルトハイデルベルクよ 美しき町 栄光に満てる町 ネッカー川の岸 ラインの川辺にも 汝に優る町はあらじ（後藤 久）

者と共に新生児ケアに取り組むためには、まず私自身がそうした彼らの背景を理解することが不可欠であり、自分が意識しない間に持っている思い込みを取り除くことの大切さや難しさを学びました。人工換気中の未熟児をほったらかして当直中にお祈りに行ってしまう医師に驚き、怒っていた当時の私は本当に無礼な外国人だったと思います。一緒に生活し、相手の文化を知ることが理解の第一歩であり、自分の考え方や感じ方とは異なる感性を持つ他者に対して思いを馳せること、何故、相手がそのような行動をとっているのかを考えることは、日本だけに留まっていたらおそらく身につかなかったのではないかと思います。

50歳代となり、高齢者施設で働くことになった私は、赤ちゃん和高齢者、特にアルツハイマー病等の認知症高齢者の間に多くの共通性があることに気付きました。それは両者が示す正直さ、純粹さ、飾りの無さであり、生まれて間もない赤ちゃんと老いて死に近づきつつある老人が世俗にまみれたこの世の両端に生きる神に近い存在であることに関係していると思います。そして赤ちゃんと母親、認知症高齢者と優れたケアワーカーの間には、言葉を越えた絶対的な信頼関係がケアを通して構築されてゆきます。無防備とも言える赤ちゃんや認知症高齢者から自分が信頼される存在になることの大切さを私達はケアを通して学んできました。アルツハイマー病の人々は、私達の世界に居ながら、各々がその方の生きてきた歴史や環境から熟成された独自の世界を持っています。私達はその方の表現するものを通して、その方が認知していると思われる風景をたとえ目には見えなくても共有することによって、途上国で異文化の人々を理解しようとした時と同じように、互いが持つ各々に固有な文化を理解することで私達は言葉を越えて繋がりが合うことができるのだと思います。



「ケア」は与える者と与えられる者が上下の関係にあるのではなく、人と人との関係性を表していると思います。超未熟児や重症新生児のケアを通して、私達は生きるエネルギーを与えられ、認知症高齢者のケアを通して私達は優しさを学びます。自分以外の他者への思いが、鏡のように自分に対する他者からの思いとして返ってくる。その関係性こそが「ケア」の本質ではないかと思います。私が医療者として関わってきた3つの世界から学んだ「ケア」について、これからも深く掘り下げてゆきたいと思います。

<参考図書>

- 1) 「時の止まった赤ん坊」 曾野綾子 新潮文庫
- 2) 「人間の土地」 サン・テグジュペリ 新潮文庫

森と水のふるさと白州からの報告

(Dreams come true) -2

おぐちこどもクリニック 小口 弘毅

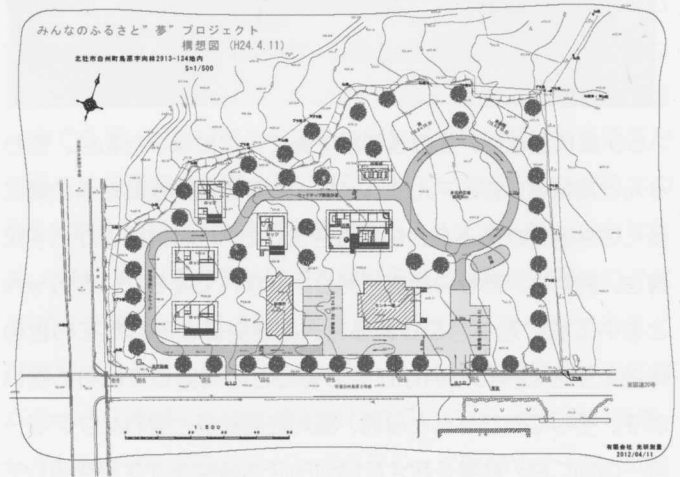


2011/7/16に「みんなのふるさと夢プロジェクト」の発足会が代々木の国立オリンピック記念青少年総合センター国際会議場で開かれました。すでに1年が経とうとしていますが、白州にはまだ何一つ建っていません。しかし、私たち実行委員はプロジェクトの準備、そして広報活動を地道に続けています。現地の測量は終わり、開発の届け出が出され、キャンプ場の見取り図も出来ています。このイラストは、私がプロのイラストレーター福井修さんをお願いして白州キャンプのイメージ画を書いてもらったものです。まさに私たちの思いが自然に表現されています。背後に聳える甲斐駒ヶ岳、周囲の深い森、樹の山小屋、畑や果樹園、そしてこども達が遊ぶ様子等をご覧下さい。

仁志田博司委員長、後藤彰子副委員長が中心となって、チャ

リティー講演会を各地で開き、白州キャンプ地で伐採式、バーベキューパーティーなどを地道に行っています。また東京水道橋から白州キャンプまでの180kmのチャリティーウォーク（米国のマーチオブタイムの発想です）を続けています。全行程を4分割し、週末の2日間で1区間ずつ皆で歩いています（3/10-11：水道橋～八王子、4/21-22：八王子～大月、5/26-27：大月～甲府、6/未定：甲府～白州町。すでに、半分の大月まで歩いています。今年70歳になる仁志田先生は皆の中心になって、難病のこどもの家族達と共に雨の日も風の日も唯ひたすら歩いています。1日に20数キロ、私たちはゆっくりペースで歩きながら、白州キャンプへの夫々の思いを語り合っています。チャリティーウォークは白州に着いたら終わってしまいます。私の母校甲府一高の伝統行事に甲府から清里高原を越えて小諸までの102kmを徹夜で歩くクレージーな強行遠足があります。そこで私は考えました、甲府から白州まで、毎年春か秋に歩き、「みんなのふるさと夢プロジェクト」の為にチャリティーウォークを同窓生、そして故郷の人達も巻き込んでやりたいと思っています。皆さん一緒に歩きますか？

日本の現状では在宅生活支援の強化が大前提ですが、在宅生活のQOLを高める為には、遊びやリクリエーションの場を提供する事も大切だと思います。白州で暮らす事で、難病の子や重症児と家族に夢と、明日への希望が生まれる事を願っています。もしかして、私たち小児科医にとっても夢であり、故郷になるかもしれません？どうかこの会報を読まれる方、難病のこども支援全国ネットワークHPの中の「みんなのふるさと夢プロジェクト」をご覧になって末永い支援をお願いします。





編集後記

3月の世話人会で、ニュースレターの名称を変更し、会報とした事をまず報告いたします。ニュースレター（会報）編集委員会にて2月に実施したアンケート調査に皆様ご協力いただきありがとうございました。長すぎる、独りよがり---の編集等の辛口のご意見も戴きましたが、多く先生方に私たちの編集方針をご支持いただいたのみならず、一つ一つの記事が心に沁み入る深い内容であると返事を戴きました。私たち編集委員は、会および会員の活発な活動を記録し、また会員にとって役に立つ記事を掲載してゆく事を確認いたしました。さらに新生児医療に携わっておられる現役の先生と新生児医療 OB である我々の架け橋となる会報にしたいと考えています。東日本大震災をテーマにした研究会「東日本大震災がもたらしたものと私たち」の内容を DVD から聞き起こしましたが、これは大震災の中で如何に小児科医が奮闘し悩んだかを後世に伝える貴重な資料になると思いました。今回会報の分量を抑える為に、研究会の内容は抄録程度にしようと考えていたのですが、そうはいたしませんでした。編集者の言い訳になってしまいますが、その結果、今回もページ数の多い会報になりました。

今回は、表紙画を初めとして多くの美しい風景画を後藤彰子先生のご主人久先生（外科医）からご提供いただきました。表紙の緑深い森に包まれたハイデルベルク城の画はロマンチストな久先生的一面が良く現れた素晴らしい画です。

編集委員長 小口弘毅

赤ちゃん成育ネットワーク会報 発行 会長 金原洋治

事務局 エバラこどもクリニック 江原伯陽 〒669-1546 兵庫県三田市弥生が丘 1-11

TEL 0795-62-8580 FAX 0795-62-8581 hakuyo@pluto.dti.ne.jp